誠実の時間

森本まさと

夕方になると暗くなり、昼よりは外気も涼しくなるのだが、製鉄所では外の気温などはほとんど関係がなく真夏の気温が常に働くものを出迎える。高炉の近くでは四十二度を超える数値が出るのだ、ここで働いているものは季節感が薄れてしまうだろう。自分も三十九年前はこの製鉄所に勤務していたことを思い出すと、年月の移ろいが早いものだと思ってしまうのだ。

「あ！　青木さんこんなところにいらっしゃったんですか、探していたんですよ。なかなか見つからないから社内放送を使おうと思っていたところですよ」

汗だくになりながら、こちらに向かってくるのは副工場長の大沢さんだった。

「ええ、もう少しで自分の会社生活も終わりますから、初心に戻って製鉄所を見ておこうと思いましてね」

普段は安全点検の日にしか訪れないが、自分の会社生活を始めたところとも言えるので、最後は見届けたかったのだ。

「そうなんですか、でも青木さんは技術開発のほうが長いと聞いたんですけど、」

「まぁ、キャリアはそっちのが長いですけどね。やっぱりうちの会社だったら製鉄所じゃない」

製鉄事業がうちの強みでもあり、世間でもそういう認識が強いのは知っているが、鉄鋼以外にも新素材の開発や都市を整備するなど、他の事業もあるのだ。

しかし、少し知名度がないのが残念なところだ……

「それで大沢さん、何か連絡事項でもあるんですか？」

「ああ！　すみません！　工場長が青木さんを呼んでいたんですよ。なんでも電磁鋼板のことで聞きたいことがあるらしいです」

「わかりました、今から行きますよ」

工場長が訪ねたいのはおそらく方向性電磁鋼板にちがいないだろう。

「青木ですが入るよ」

ドアをノックして入ると書類を整理している、矢場工場長がいた。

「すみません、青木さんわざわざお呼びしてしまって、本来だったら、私が本社に行って訪ねるべきなんですが。なにせ最近は南米での受注が決まった、海底天然ガスパイプの試験テストに追われていまして、時間がなかったものですから。どうぞこちらに」

応接用の椅子を勧めたのでそこに座ると、矢場さんは麦茶をこちらに持ってきた。

「ああ、どうも。こっちの時間の都合は大丈夫ですよ、私はもう明日の人事で勤続生活四十三年を終える、老兵ですから」

「そんな老兵は言い過ぎでしょう。なにせ青木さんは愛知製鉄の技術開発事業部のエースじゃないですか」

「エースだなんて、それも皆が鋭意に努力したおかげですよ。私だけだったら、到底あんなものは作れませんでしたよ」

それは本心からの言葉だった。もし自分だけだったら、完成には程遠かっただろう。

「また謙遜するんですから、青木さんはもう少し尊大な態度をとっても大丈夫ですよ」

尊大な態度か……私にもそういうのがあれば出世でき

ていたかもしれないな……
「それでも、うちの研究所がここ何年間も成績が良いのは青木さんのマネジメント能力のおかげですよ、それに方向性電磁鋼板もさらなる改良ができましたしね」
「私のマネジメントなんてたいしたことないですよ。方向性電磁鋼板も、先代が積み上げた技術を私たちの代でさらに発展させただけですよ。私は通電ロスを減らす、方法を研究員達と一緒に試行錯誤して、やっと開発できたものなんですから」
　新たな通電方法を探すのは至難の道だったが今となっては良い思い出となった。会社生活の中で一番落ち着くのは私にとっては機械をいじくることや、新たな開発に取り組むことだけだったかもしれないな。
「やっぱり青木さんは自分の手柄を自慢しないな。これだから下の者からは好かれるんだよな。よし！　じゃあ青木さん、そろそろ確認書にサインしてもらえますか？
　もし忘れてしまったら会社を退職した後もここに来ることになっちゃいますから」
　笑いながら席から立ち上がり、机の中から右上に『極秘』と印刷された赤の半透明の紙を取り出して矢場さんはサインをして、私のほうに差し出した。
「若いころはまさか自分がこれにサインするなんて思ってもいませんでしたよ」
　サインをして、朱肉のハンコを押し、矢場さんに渡した。
「技術屋の勲章みたいなものですからね、これにサインして会社を退職するということは、それだけですごいことですよ」
　矢場さんは私のサインを確認する。
「はい、大丈夫です。確認しました。研究所回りはここで最後でしたよね？　お疲れさまでした」
「やっぱり、引き継ぎ作業は大変でしたね。先輩達の苦労もわかりましたよ」
　鞄を持ち、服を整える。これで研究所回りが終わりだ。半年間の間に全国を行脚するのは存外に疲れた。
「それじゃあ、私はこれで、また今度ゴルフでもやりましょう。美浜カントリークラブでやるのを楽しみにしてますよ」
「いいですね、じゃあそのときは大沢君も呼んで一緒にやりましょう。私もだいぶ上達したんですよ、青木さんにはまだまだ敵わないですけど」
「じゃあ、今度腕前を見せてもらおうかな、それじゃ楽しみにしてますよ」
　お互いに笑いながら会釈し、私は部屋を後にした。

　名古屋駅で東京までの新幹線に乗り、私は弁当を食べていた。今日でこの名古屋コーチンのから揚げ弁当を食べられなくなると残念だ。いつもは東京の本社の会議に出席する日はこの弁当を食べるのが私の楽しみだったのだが、それも今日で終わりだ。
　三十九年前に愛知製鉄に入社したときに、出来たばかりの製鉄所が愛知県の弥富市にあり、私はそこに技術員として派遣されたのが会社生活の始まりだった。当時は製鉄業中心であり、会社も大いに製鉄所の建設を進めていたが、製鉄業一本で会社を経営していた経営陣が不祥事で退任したことをきっかけで、新たな経営陣は様々な分野に進出することを決めたのだった。製鉄、環境、エネルギープラントの建設のエンジニアリングや製鉄業を強みとしていた愛知製鉄のコークスやコールタールを利用した石油化学業、都市計画業、システムの企画、運営などをするシステムソリューション業などの多岐に渡る事業展開を計画した。
　私はその計画の一つの技術開発業に携わることとなった。私が得意としていたのは『電磁鋼板』の改良だった。
　変圧器などに利用されるこの電磁鋼板は発電所の発電機や動力用のモーターなど身の回りにあるものなどに使われているものである。余り注目がされない部品でもあるが、電磁鋼板がいかに優れているかどうかで、その電化製品の優劣を決める重要な要素にもなる。
　私は技術開発業に着手して以来この電磁鋼板に注目した、これをより良く改良すれば、エネルギー効率をより良くし、多くの『電気』を使う物を発展させることができるからだ。
　その更なる発展に成功したのが『方向性電磁鋼板』だった。わが社の技術開発の中での秘匿度は最高ランクであり、私の開発人生の中でもトップに立つものだ。
　今日の弥富製鉄所の中にある、研究所で開発されたものであり、私も開発メンバーとして関わっていたので、秘密保持の契約にサインをしたのが今日の目的だった。
　愛知製鉄の電磁鋼板は世界のシェアの七割を占めるようになった。しかし、これは技術の秘匿性が守られているからだ。もし、技術が外部に漏れればこの分野での独占権はなくなり、収益の柱を一つうしなってしまうことになる。会社は私のような退社した人間が技術を流出しているのを恐れているのだろう。
　会社が心配するのも分かるが、普通の人間なら他社に

情報を渡したりなどはしないはずだ。自分達で大切に作り上げた物を他人に渡すことなど……普通の人間であればだが……

　愛知製鉄の本社は千代田区の丸の内にある。昔は名古屋に本社があったのだが、バブル時代の後に東京に移転したのだった。バブル後は土地の価格が下落し東京の土地が買いやすくもなり、国際化の波にも対応するためだ。この界隈は大手企業が多く、サラリーマンの数も多いものだ。本社のビルは東京駅にも近く、昨日はホテルで一泊したがまだ体の疲れは少し残っているようだ。愛知県から東京に戻ってきた疲れた体でもすぐに辿りつけるのが有難い。

「おはようございます。社長との面会の約束をしていた青木肇ですが、社長はいらっしゃいますか？」

　エントランスを抜け、正面の受付口で要件を伝える。

「はい、承っています。どうぞ、社長室でお待ちになっていることなので、社長室までどうぞ」

　笑顔で答える受付の女性を後にして、エレベーターに乗る、社長室はビルの十二階にあるので、十二階のボタンを押す。

「おーい！　そこのエレベーターちょっと待ってくれ！」

　大声がしたので、慌てて扉を開けた。

「いやすまんね、うん？　青木君じゃないか！　ああ！今日は契約終了日だったか。だからかー社長に会いにきたのか」

　慌てて入ってきたのは副社長の岡崎さんだった。

「おはようございます副社長、そうなんですよ。本日を持ちまして、長い宮仕えも終わる身なので、社長や皆様にご挨拶をと思いまして。そこで今日は本社のほうで社長が雇用契約の終了手続きをしてくれるそうなんです」

「そりゃ、よかったな！　なかなか社長自らというのはないもんな。普通は人事課に行って手続きして終りだが、やっぱり社長賞を三回取った男はちがうな」

　笑いながら私の肩を叩く岡崎副社長、彼は人を褒めるときは必ず人の肩を叩くのだった。それが人のやる気を引き出す彼なりの方法らしい。私も叩かれて嫌な気持ちはしない。

「有難いものですよ、技術だけの取り柄しかありませんけど、ここまで取り立ててくれるなんて、思ってもみませんでした」

「おいおいあんまり謙遜するなよ。君の技術が作りあげた実績だろう、もっと胸を張れよ。まぁ、でも君のその性格があってこそ、君はここまで登ってきたのかもしれんな。ところでなんだが……後で私の部屋に来てくれないか？　ちょっと話があるんだが」

　先ほどまでの軽快な顔から神妙な顔の表情になり副社長は言った。

「はぁ……わかりました。じゃあ要件はまた後でお伺いします」

「おう！　じゃあまた後でよろしく頼むよ！」

　顔に笑みが戻り、副社長室がある十一階で降りて行った。

　一体何の話だろうか、いつもは笑顔を絶やさない岡崎副社長は営業で立身出世を叶えた人物だ。剛腕とも言われ強引な方法も使うが、周りを引っ張り成果を出してきた人間だ。そんな人物がわずかの間に見せた顔が気になりながら、社長室へと向かった。

「社長、青木ですよろしいでしょうか」

　厚い木製のドアをノックする

「はい、どうぞ」

「失礼します」

　社長室に入ると、そこは東京製鉄の長が君臨する部屋にしては無骨な部屋だった。社長の机の手前にソファとテーブルがあり、左手には愛知製鉄の各地にある製鉄所、研究所、営業所の位置がディスプレイに日本地図上に写しだされているだけで、豪華な調度品などは一切置いてなかった。おそらく部屋の主が変わってもこの部屋は変わらずに存在していたのであろう、愛知製鉄の剛健的な性格が体現されたような部屋だ。

「青木君、今日は君の退任式を社長以下の常務取締役員で行うつもりだったんだが、急に取り掛からなくてはいけなくなってね。申し訳ないが私だけでさせてもらうよ」

　そう答えたのは社長在任歴六年目になる、黒坂裕二社長がいた。身長が大きく、その背丈に灰色のスーツが収まっており、メディアでは『日本刀』とも呼ばれる手腕は鋭く、経営が多角化し、暗礁に乗り上げた愛知製鉄の業績を回復させた。さらに、愛知製鉄が国内や海外の企業と競合してきた百戦錬磨の男だった。

「あっ……はい、構いません。そもそも一介の技術屋にすぎない私にここまでやってくれるのは恐縮の限りで

す」
「君は本当に自分のことを自慢したりすることがないな、だが、そこを見込んで四年前、執行役員にしたんだ。君が国内の研究所を見て回ってくれたおかげで業績が上がったよ。後輩の面倒見が良いと評判だ。株主総会で株主から叩かれることも少なくなったよ」
「そんな私だけではなく、社員一同努力した結果ですよ。私がこの四年の間でしたのは私の技術を後輩に教えたことだけですよ」
「それが重要なんだ、ただでさえ熟練の技術者はここ数年で退職数の増加が激しかったんだ。君の働きは素晴らしい成果を生み出してくれたよ」
　なかなか褒められる機会などこの年になるとないものなので嬉しく思う。
「青木君、早速で申し訳ないが、君の執行役員としての終了契約書に目を通してくれないか、終わったらサインしてくれ」
「はい、わかりました」
　契約書に目を通し、下にある署名欄にサインをし、印鑑を押した。
「うむ、これで君は明日からフリーな人となるのか、何か趣味とかはあるのか？　仕事だけが趣味な人間だと妻から嫌われるからな」
「そうですね取りあえず、明日からゴルフ巡りでもしようかなと思ってます。私の趣味と言ったらこれくらいしかないですが」
　家計のことを考えると、月六回の早朝コースが限度なのが残念だが。
「そうか、君もゴルフが趣味なのか、私も最近は忙しくて付き合い以外のができてないな。今度一緒にどうかな？」
　ゴルフクラブを振る動作をしながら言った、黒坂社長だが顔は全く笑っていなかった。口元の端が上がっているので朗らかな表情に見えなくもないが、目が笑っていなかった。
「社長一つ聞いてもよろしいでしょうか？」
「何かな」
　私が同意する返事をすぐにすると思っていたのか、話題を変えたことに少し驚いた顔をしている。
「私の退任式が行われなかったことなんですか、会社で何か起こったのでしょうか？」
　雇用契約が終了し、会社とはついさっきで縁を切ったので最後くらいは立ち入った質問をしても良いだろう。
「……確かに、誰が見ても不自然に思うな……さてどうしたものか、これは君に言えることなのだろうか……」
　顎に手を当てながら考えているところを見ると、深刻なことが起きていると予想できた。
「このことを君に話して良いのか、悪いのか、難しいところだな……しかし、青木君にも関係があることだし……君はもう大丈夫か……青木君、私が今から話すことは全て他人に話すなよ。たとえ家族であってもだ」
「わ、わかりました」
「そうか、なら話そう。実は我が社の極秘技術の一部が外部に漏れたようだ。これは先月にフランスのパリで行われた製鉄企業のパーティがあり、そこでインドのスティンアール社のレクシュミＣＥＯの言動からそのような動きを感じられてね、調べさせたら、どうやら他の企業で我々の技術が使われていそうな形跡が見られる製作物があった。その漏れた技術の中に君が開発したものもあるかも知れないということだ」
　社長が悩んでいた事案は私の予想を遥かに超えていたことだった。
「知っての通りだが、秘匿性の高い技術が外部に漏れることは内部から外部に情報を流失させた人物がいるということだ。特に君が関わった『方向性電磁鋼板』などは他社に流失させたら大変なことになるだろう」
　社長の言う通りだった、『方向性電磁鋼板』は愛知の中では有力な商品だ。これが漏れるということは収益の柱がなくなるかもしれないことだ。他社が愛知製鉄の方向性電磁鋼板を製作するとしたら、部品を作る段階で多くの機材が必要であり、その機材は愛知製鉄が特許を取得しているものがほとんどであり、他の企業が正式な手続きを踏んでいるのならば、ライセンス契約を申し込むはずなので愛知製鉄側にも伝わってくるはずだ。
「技術の流失は止められたんですか、早く止めないと……」
「そんなことは君に言われなくてもわかってる！　さっき君から言われてことに答えれば、君の退任式が行われなかったのは愛知の全役員におかしな動きがないか調べているからだ。もちろん、君も調べたよ。君にはおかしな動きがなかったからね。だからこのことは君に話したんだ」
　荒くさせながら言った口調は怒りと焦燥がふくまれていたように感じられた。離反者が出たことは社長にとっても私にも悔しいことだ。
「すまない、荒くなりすぎた、青木君、このような事を辞めていく人間に話して申し訳ないね。君に話したのは君が会社を辞めただけじゃなく、君の誠実な人間性を信頼したからだ。これから第二の人生を歩むことになる、その誠実さを大事にしていきなさい」

振り返って見れば、自分から良いことをしているつもりはないのだが、他人から見ると私の行為は誠実に見えるらしい。研究に没頭するあまり、対人関係の構築をしなかったら優秀な同期より出世が遅れた。しかし、どこかの派閥に入ることをしなかったおかげで自分の研究に集中できた。周りには変人だと思われたかもしれないが、自分を信頼してくれた人間がいてくれたのは会社という組織で生きることは重要なのだろう。

「ありがとうございます。長い会社生活の中で最後に温かい言葉をいただけて嬉しいです。社長もこれから大変でしょうか、どうか体は大事にしてください」

「ああ、気をつけるようにするよ。では元気にな、間違っても会社の情報を漏らすなよ」

普段は人前で笑うことはない、社長が顔を緩ませた。

「それだけは絶対にないですよ」

私も笑い一礼して、部屋を後にした。

副社長の岡崎さんに呼ばれているので、一一階の副社長室へと向かう。やはり、情報漏洩のことだろうか、これだけの事件になると何回も調査することがあるのだろう。

「失礼します、青木です」

扉をノックし入る。

「おお、よく来てくれたね。さぁそこに座ってくれ」

部屋に置いてある、高級ソファを指差した。社長室とちがい、部屋に置いてある物が豪華な印象がある。そういえば副社長が腕につけてある腕時計はスイスの老舗のオーダーメイドで作ったものだと、社報で書いてあったような気がする

「それで話とはなんでしょう、副社長」

「それなんだが、君は会社を辞めてどこか行くあてはあるのかい？」

「いえ、どこにも行く予定はありません」

愛知製鉄の技術員は退職したときに、秘密保持契約を結んだ者は他社に技術を流出するのを防ぐため、再就職先は子会社となっているのが慣例だ。しかし、私は天下りの類はご遠慮したい。天下り先の社員からはあまり良く思われないからだ。。

「そうか！　実はだがニューヨークパーソナルの人間が君に話したいと言ってね。どうかだろう一度会って見ないか」

ニューヨークパーソナルは世界の人材会社の中でもトップを争う会社だ。そんな会社が私に求めるものは一つしかないだろう。

「それは他の会社に転職するということですよね、業界が同じ製鉄なら私はできません」

「いやいや、青木君、技術員としてではなく、マネジメントの業務を君に希望している会社があるらしくてね、それで私が君を推薦したんだよ。話だけでもいいから明日にでも会ってみてくれないか」

名刺入れからニューヨークパーソナル社と書かれた名刺をテーブルに取り出した。

「すみません、副社長わたしのようなものを推薦いただいたのは恐縮なことなのですか、仕事に全力を出せる年でもなくなってしまったので、この話はお断りさせていただきます」

「ふむ……わかった……いや引きとめて悪かったね、この話は忘れてくれ」

思いつめたような表情をした後、いつもの快活な表情をしながら言った。

「大丈夫ですよ、ご挨拶に上がろうと思っていたところですから、では失礼します」

「今までご苦労様、ありがとう」

お互いに握手をし、私は部屋を出た。

会社を辞めてから三ヶ月が経ち、晩秋になりゴルフがしやすくなった。今日は夜更けには家を出発し早朝にはゴルフ場に着き、朝ゴルフを堪能していた。朝ゴルフの長所はスタートが早く、午前中から回る通常のゴルフよりも値段が安いことと、終了する時間が十一時くらいには終わるので午後を好きなように使えることだ。短所は整備係の人が来る少し前から始まるので芝が伸びていたりして、自分が思った方向にボールが行かず、力の入れ具合も普段より意識しないとすぐにオーバーしてしまうのだ。今日はこれにやられてしまった。いつもなら、九十二前後でホールアウトするのだが、グリーンでの失敗が続き、百三でホールアウトいう記録を出してしまった。金をケチるとこんな弊害も出るのが早朝ゴルフであった。

気落ちする気持ちを引きずりながらゴルフ場のレストランで昼食を食べ、今は食休みに紅茶を飲みながら新聞を読んでいた。サラリーマン時代に新聞を読む習慣が今になっても続くということは一生読み続けることになるだろうな。政治欄を見た後は社会面をめくり、社会の情勢を読む。どうやら、粉飾決済をした企業がありストッ

プ安を引きおこしたそうだ。隠し事を一生隠すのは個人でも難しいことだが、企業という多数の人間が集まる場所ではなおさら難しいということだろう。

紅茶を一口飲もうかとカップに手をかけたときに、鞄の中に入れてある携帯が鳴った。良くないタイミングでかけてきたものだ。

「はい、青木です」

「青木君か、黒坂だよ。久しぶりだね、ちょっといいかな」

電話の相手は社長だった。辞めた人間に何の用事だろうか。

「大丈夫です、社長ご用件はなんでしょうか」

「じゃあ一から説明しようか。先日、副社長の岡崎を解雇した」

「えっ……」

なぜこの時期に解雇なんだ？　人事異動の時期にはまだ先だろう。

「社長、なぜ岡崎さんを解雇したんですか、あの人は愛知に多くの仕事を持ってきた人じゃないですか」

事実、岡崎副社長が常務時代に海外営業部門を統括していたころは、南米に愛知製鉄初の海外製鉄所を作る商談をまとめたのは彼だった。海外はインドのスティンアール社にシェアを多く奪われ、南米での争奪戦では愛知製鉄がなんとか勝てたのだった。

「岡崎君が多くの功績を私も認めてるよ。だがな、彼は製造業ではやってはいけないことをしたからな、だから解雇した」

製造業ではやってはいけない最大の禁忌は一つしかない……

「岡崎さんは他社に会社の情報を売ったということですか……」

裏切り行為の代償はクビだけではない。おそらく他にもペナルティはあるだろう。

「全くもって不愉快なことだ。岡崎はどうやら多額の借金があったようでね、君は知らないだろうか彼はギャンブル狂でね。海外に行くときは必ずカジノに行っていたらしい。それで負け分が払えなくなり、会社の情報を売り、他社からお礼を貰っていたということだ」

そんな……あの岡崎副社長がそんなことをやるのは想像がつかなかった。ではなぜ、私を人材企業の人間に会わせようとしたのだろうか。

「私が社長室を出た後に岡崎さんに会ったんですが、そのときに岡崎さんは私を人材企業の人間に私を会わせようとしたんですか、これはおそらく……」

「そうだな、おそらく技術力がある君を他社に紹介し、もし君が採用されたら、そのマージン料を貰う手筈だったのだろう」

私が引き抜きの話を引き受けていて、人材会社の言うことを聞いてライバル会社に入ったら、自分の技術を売ることになっていただろう。もしかしたら、岡崎さんは自分以外に共犯者を作り、自分の罪悪感を減らそうとしていたのではないだろうか。途中で見せた顔はどこか落胆した表情と共に寂しげであり、今から思えばそのように感じられる。

「社長……もしかしたら、私と部下が作りあげた。愛知の方向性電磁鋼板も漏洩したと言うことでしょうか……」

「君に伝えるのは酷なことだが……先日に韓国のコーホー鉄鋼がわが社にそっくりの製品を市場に流しはじめてな。その中に君が作った方向性電磁鋼板も含まれていたようだ。おそらく、インドのスティンアール社からの二次流失だろう」

技術が流失したことは会社にとっては大きな被害だ。研究費を捻出してない他企業は容易に設計図を手に入れすぐに安価な製品を作りあげてしまう。ともかく会社は大きな痛手を負った。

「岡崎には損害賠償の請求をしといたよ、コーホー鉄鋼にもな。ただし、マスコミにも嗅ぎつけられるからこちらも覚悟しなければならないな」

マスコミに愛知製鉄の情報漏洩が伝われば、会社の信用が低下し、株価も下がるだろう。今後の取引も相手から信用されなくなる可能性も出てくる。情報漏洩は二次災害を生むことになる。

「これからどうするのでしょうか……」

会社の重役が起こした事件なので、社内にも不安な空気が残っているだろう。

「実はそのことで連絡したんだが、青木君もう一度愛知で働いてくれ」

もう一度働く？　一体どうしてなんだろうか？　だが技術屋にすぎない私はマネジメント業ができなかったから執行役員止まりだったが……

「それは技術屋としてでしょうか？」

「いや、君の技術と君にはこれから人事の仕事もやってもらうことになるな。これからは人を使う仕事もやってもらうよ。私の周りは実力主義の人間が多く、その手の人間は他人にも冷たくなり会社の雰囲気も悪くなってしまう。そこで君の他人を尊重して接する性格と一つのことに集中して取り組む技術屋の面二つを考慮した考えだ」

社長はそう言うが、私はどうなのだろうか。確かに、他人に冷たく当たったことは人生であまりないような気

がする。しかし、出世街道では必要な闘争心がなかったので昇進は望めなかった。

「どうだろう青木君？　周りを尊重し、相手を立てる術を知った人間が今は必要なんだ。役員達も君なら納得するはずだ。頼む、愛知でまた働いてくれないだろうか」

社長直々にここまで言われて「いいえ」と答える選択はないだろう。私のような人間とシノギを削りあうことが苦手な人間でも必要だというのならば、今はその要望に応じてみようかと思う。